

共同研究報告

越境の文学（2）

1 学内研究構成員

森田明、田中敬子、新井透、谷口幸代、山本明代、土屋勝彦

2 学外研究構成員

デビッド・ゾペティ (David Zoppetti) (スイス人日本語作家)

今福龍太 (札幌大学文化学部教授・文化人類学者・批評家)

3 研究概要

昨年度に引き続き、自文化と他文化との交流・衝突する磁場において発現するトランスカルチュラルな経験の諸相と表現形態を考察するために、第一線で活躍する二人の専門家を招聘し、講演討論会を行った。以下その概要を紹介する。また、谷口と土屋は、昨年度招聘した日独作家・多和田葉子についての本邦初の論集『多和田葉子—越境文化の中間地帯で書くこと』（三恵社）を出版した。共同執筆者は多和田葉子氏、ジークリット・ヴァイゲル氏（ベルリン文学研究所所長）、ポガチュニク氏（ベルガモ大学教授）である。

デビッド・ゾペティ (David Zoppetti) 氏「越境の文学とコスモポリタニズム」:

「越境の文学」という名称は、和製の日本語ではないか。Transcultural literature という英語はまだ聞いたことがない。「越境作家」の定義として、母国語以外の言語で文学活動をしている人と考えたい。したがって多くの旅行をしたヘミングウェイや日系のイギリス作家カズオ・イシグロはこのジャンルには入らない。自分のルーツをたどれば、母がアメリカ人で、父がドイツ語圏のスイス人、家族はイタリア系移民、住んだ場所がスイスのフランス語圏という境遇で育ったために、年少期はフランス語、ドイツ語、英語、イタリア語を話していたので、母国語が何かと問われても戸惑いがある。

越境の作家をリストアップしてみると、ポーランド生まれのジョゼフ・コンラッドは、20歳でイギリスの船員となり海の男たちと英語で話したのをきっかけに、その後英語で作品を書いた。一般には海洋小説と呼ばれているが、実際は人間の本質に迫る倫理作家である。ザンクト・ペテルベルクの名門貴族の出身であるナボコフは、ロシア革命時に亡命しベルリンからパリへ逃れ、

フランス語とドイツ語を使ったが、戦火から逃げようと（44年）アメリカに渡り英語で執筆している。代表作は『ロリータ』。英語作品には言葉遊びが見られるが、ロシア語で書いた『絶望』は完全犯罪をたくらむ男の話でとても面白い。サミュエル・ベケットは、アイルランドのダブリン出身で、パリへ渡りアイルランドに戻り、またロンドン、ドイツ、パリへ行って、処女作がイギリスの文壇に認められなかったせいか、フランス語で執筆した。代表作は『ゴドーを待ちながら』。ロマン・ギャリ ROMAIN GARY (1906～1980) はフランス文学では有名な作家だが、モスクワ生まれで、母親はユダヤ人女優、放浪して13歳でフランスのニースに行った。フランス空軍のパイロットとなり、デビュー作は英語で、その後フランス語で執筆し、51歳でゴンクール賞を受賞。代表作は『LES RACINES DU CIEL』（「空の根っこ」）、しかし60歳を迎えた頃、一般読者や評論家にとって「昔の人」に成り下がったという焦りと憤りにかられて、1974年以降、別の名前 EMILE AJAR (エミール・アジャール) としてデビューし、甥のパウロヴィッチのゴーストライターとして活躍した。1974年に『LA VIE DEVANT SOI』（「人生はこれから」）で再びゴンクール賞を受賞した。にもかかわらず、文学者として深い幻滅感を抱き、計画的な自殺を果たす。ミラン・クンデラ MILAN KUNDERA (1929～) は、チェコスロバキア生まれでチェコ語で書いた作品が反共産主義的だとして発禁処分になり、その後フランスに亡命し、フランス語で作品を執筆した。古きよきチェコ人を物語っている。インド人の BHARATI MUKHERJEE (バラティ・ムケルジー) (1940～) は、8歳でイギリスに渡り大学の創作コースを修了し、アメリカで結婚しカナダに移住したが、その後さらにアメリカに移住した。彼女の場合は自分のルーツを否定してアメリカ社会に同化しようとしたので越境作家としては残念である。代表作『THE TIGER'S DAUGHTER』（「虎の娘」）、『WIFE』（「妻」）、『JASMINE』など。ほかにロシア生まれでアメリカに亡命した JOSEPH BRODSKY (ジョゼフ・ブロッスキー) (1940～1996) もいる。M.G. VASSANJI (エム・ジー・バッサンジ) (1950?～) は、母語がスワヒリ語で、20歳でアメリカに移住し、さらにカナダで技師として働く。代表作の『THE BOOK OF SECRETS』（「秘密の本」）では、イギリスやドイツの植民地時代のアフリカの変貌を壮大なスケールで描き、『NO NEW LAND』（「新天地にあらず」）では、トロントという多人種多民族社会に自分の居場所を追い求めるアフリカ人移民の苦悩を英語で執筆した。（こうした世界の越境作家に対して、日本ではまだ数が少ない。そもそも世界では越境作家という区分けがないほど多い。2年前の『現代』に特集があり、リービ英雄や中国人作家、韓国人作家、アメリカ詩人などが紹介されている。）ワシリス・アレクサキス VASSILIS ALEXAKIS (ヴァシリス・アレクサーキス) (1951～) はギリシャ生まれで、17歳でパリに渡りフランス語とギリシャ語で執筆している。フランス語で自伝小説を書き、その後サンゴ語（中央アフリカのサン人の話す言語）を独学でマスターし、フランス語とサンゴ語の混じった作品を書いたが、これを読むとサンゴ語を覚えるような気がする。代表作『LA LANGUE MATERNELLE』（「母語」）、『LES MOTS ETRANGERS』（「異国の単語たち」）。

共同研究報告

マイナー言語への憧憬は私と同様である。中国人のDAI SIJIE (ダイ・シージェ) (1954～) は、フランス文学への憧れからフランスに移住し映画監督となるが失敗し、『BALZAC ET LA PETITE TAILLEUSE CHINOISE』(『バルザックと中国の小さなお針子』) でベストセラー作家となる。キョウコ・モリ Kyoko Mori (1957-) は、英語で日米比較文化論や短編小説、詩を書いている。代表作は『Shizuko's Daughter』『One Bird』『The Dream of Water』。多和田葉子は22歳でドイツに渡りドイツ語と日本語で創作している。1972年生まれの人 SANSА (サンサ) (1972～) は、フランス語で2冊本を書いた。つまり『L'IMPERATRICE』(「皇后」) と『LA JOUEUSE DE GO』(「碁を打つ女」) である。さて、こうした越境作家の出現の背景は何か。コンラッドとベケットは例外として、二つのグループに分けられる。ひとつはナボコフやギャリ、プロツキーなど外的要因により亡命した文学者たちである。もうひとつは、本人の自由意志による選択であり、移民文学とも言えるが、これは20世紀後半の世界的傾向を反映している。現在の世界は、グローバル化という一元化あるいは同一価値観の拡大化と、コスモポリタニズムという、各自のアイデンティティを持って移住し、その国のルールに従いながら活躍するという形式の二つの現象が見られる。私は後者のあり方を支持する。コスモポリタンな社会とは、幕の内弁当のようなもので、個を大事にしながら活躍する共生社会である。こうした社会をトロントとマレーシアに見ることができる。「移民たちはそれぞれの希望と込み入った事情を抱え、それぞれの曲がりくねった歴史の回路を辿り、寄せ合うべき町としてトロントに寄り合っていた。」(作品『アレグリア』からの引用) また、マレーシアでは、マレー人、インド人、中国人が、それぞれイスラム教、ヒンズー教、仏教を信奉しながら共生している。こうした「理想的な」社会から越境作家たちが生まれてくるだろう。日本もいつかそうしたコスモポリタンな社会になってほしいと願っている。過去の越境作家が亡命作家であるのに対して、現在の越境作家はコスモポリタニズムの世界に生きている。私もその一員として執筆していきたい。

質疑応答に入り、多言語地域であるスイス人であることと越境作家になったこととの関係について、ヨーロッパとアジアにおける沈黙の意味の相違について質問があり、スイスは移民の国であり、それぞれのルーツは多種多様で、確かにそれが越境というものに関心を持った根源にあるとの回答であった。アメリカとスイスの国籍を持つ自分から見て、アメリカが外の世界に疎く、洗脳されやすいことを危惧している。日本も単一民族神話や一元的な文化風土があり、それを変えていくべきだとの意見だった。沈黙については、確かに東洋では肯定的だが、西洋では否定的な側面が強い。いずれにせよマレーシアではそれぞれの宗教と文化を保持しながら自己主張している点を評価したい。また、話し言葉と書き言葉の関係についての質問に対しては、日本語を独学で勉強したときに、写経のように文字から入ったので、話し言葉との乖離はあまり感じない。むしろ、書き言葉を通して自己表現することに喜びを感じる。もちろん作品の中で自然な会話の

言葉を模索することはある。日本の作家なら許されないが、外国人だから認められると、編集者から指摘される日本語表現もある。自分の作品を自分でフランス語や英語に翻訳するつもりがあるかとの質問には、時間的な制約があるという理由と、仏語・英語の言語能力について日本語と比べて自信がないとの回答があった。その後の議論では、日本近代文学の諸問題や日本文学における位置づけ、今後の方向性など活発な議論となり、それぞれ丁寧な説明を受けた。ゾペティ氏の講演はとても興味深い知見を含んでおり、とくにフランス語圏での越境文学の諸相について理解を深めることができた。また、様々の質問に対して明確かつ丁寧に答えていただき、その人柄とともにとても好感が持てた。参加者一同、越境のテーマについて考える貴重な機会となったことを嬉しく思うとともに、ゾペティ氏の今後の更なるご活躍を祈りたい。なお、まもなく彼の新作長編小説『命の風』が上下巻で新潮社から刊行される予定である。

今福龍太氏「ハイ（トロピ）カイー熱帯の文学的ミニマリズム」:

<Border Writingとの関わり>

越境の文学という言葉は、ボーダーライティングとかWorld Literatureとも呼ばれる。世界文学はもともとゲーテが使った言葉だが、日本ではword music(15年ほど前)と連動して使われた言葉である。シャモアゾの言葉にOmuniphone Literature (偏在する文学)があり、それはひとつの言葉に鳴り響く多くの言葉であり、新しい文学状況を指し示している。境界的な文学が成立するのは、国籍から来る各国民文学(国家的な枠組みの中で生産・消費される文学)が打破されるときであり、そうした新しいリアリティをさす言葉として、多和田さんのExophon Literature(母国語の外に出た文学)という言葉もある。その『エクソフォニー』の本の帯にクレオールと越境という言葉に×印が付けられて否定してあったが、その場合何を否定したのかを示す必要がある。古いと宣告された「クレオール文学」ではあるが、しかもその後、狭い概念としてフランス語圏のクレオール文学に閉じていく傾向があるが、クレオールの原義は「育つ」の意味であり、また文化の本体をなす身体的な概念として現在でも有効であろう。生まれを問わずに、クレオール的な文化的実践を行っている政治的、歴史的な経緯(出自)を探るような概念的な歴史的研究や批判的な方向を、一度宙吊りにしながら、「育つ」という文化的な実践を生きていくことが重要である。拙著『クレオール主義』は、文学的な素材を使いながら、ヘテロロジーニアスなものが混合しながら文化的な実践が行われている現場の思考の道筋を書いたものである。そのときに大きなインパクトを与えたのがレズビアン・メキシコ詩人アンサルドゥアの『Borderlands/La Frontera』(1987年)という本であり、これはエッセイと詩が混在したもので、マイナーな出版社から出版されたが、その後のアメリカにおけるマイノリティ文化やポストコロニアリズムの先駆的な作品だった。この本は、英語とスペイン語の二言語の実践であり混合物であり、両者のリアリティが

共同研究報告

投げ出されつつ、衝突しあう闘争的な著作であった。越境的な文学に対する私の関心のなかでは、コスモポリタンの文学の実践者と、不可避的な形で多言語的な状況に落ち込んでいった言語的实践とを分けて考えていた。ボーダーライティングに関しては、1992年に「越境する世界文学」(雑誌『文芸』特集号)を出したが、それはサイドやラシュディ、ボウルズ、アレーナス、キムなど、越境的な文学者たちを扱ったエッセイのアンソロジーであり、その出発点として渾然たる問題意識と雑居性を持っていた。ここに大づかみの問題意識が出ており、亡命者のみならず、さまざまなタイプの越境的な文学的实践者が紹介されている。その後出版された『世界文学のフロンティア』(1996-97)は、四方田氏、沼野氏と私の3名で編纂したシリーズであった。これも各国文学の足枷から脱出したアヴァンギャルドな試みである。ただ3名の視点はそれぞれ微妙にずれている。四方田氏が歴史的視野のもとに編纂しており、沼野氏が小説というジャンルを意識しながら編纂したのに対して、私の扱った作家はもっぱらマイナーな作家たちであり、一国内のドメスティックなものとして文学をとらえず、何語で書いているかを中心にして編纂したアンソロジーであった。何人であるかを問題にしなかった。その中の一人のパフォーマンス詩人・作家ギリエルモ・ゴメス＝ペーニャの『ボーダーの呪術師』を訳したが、この作品は英語とスペイン語の二言語表記で書かれており、さらにチカーノ語(スパングリッシュ)、ナワトル語(インディオの呪いの言葉)を交えて語られる一人芝居である。しかも4つの言葉が無数の方言と階級言語に枝分かれしているために数十の言語的实践・混合体になっており、そもそも翻訳が不可能である。というよりも、翻訳というものはひとつのイデオロギーであることを気づかせる。各国文学が自己完結的な単位となって、一定の水準に達して翻訳可能な状況になったとき、文学的に共有しうる理念が生み出されて各国文学が成立した。つまりゲーテの言う世界文学は、アイデアが翻訳可能であるという前提があった。その意味で翻訳というイデオロギーと世界文学という概念が同時に成立したといえる。その翻訳という概念がここでは破綻する。そもそも翻訳とはいったい何か。複合化されたテキストを日本語という一言語にする試みによって、逆に翻訳の問題が明らかになる。このテキストは、語られる意味よりも、語るパフォーマンスが重要なのである。これは演劇空間に投げ出されたテキストであり、演じられる場所によって語られる言語の割合も変化する。意味が成立しないところで作られる複数のテキストである。翻訳が無意味となるような言語的实践であり、そこでは近代的な翻訳というイデオロギーが失効する。

ここで翻訳可能性と世界文学との関係を考える。越境作家といわれるカズオ・イシグロを例にとれば、5歳でイギリスに渡ったイシグロは、日本を幻視しながら英語で創作している。彼の作品の翻訳は可能であり、翻訳という行為自体が問題にはならない。むしろ私の関心を持つ境域にある文学的实践は、翻訳が崩壊する場所にある文学的实践である。その後、最近完結した『21世紀文学の創造』というアンソロジーを編纂したが、これは様々の作家たちに言語やアイデンテ

イティとのかかわりをエッセイ形式で書いてもらうシリーズであり、私の担当した2冊では、非日本人としての日本人作家、つまり日系アメリカ人やコリアン系アメリカ人、日系コリアン、沖縄の作家たち、海外帰国子女たちに書いてもらった。その一巻である『境域の文学』で扱ったブラジルのモダニズムを取り上げ詳しく述べたい。つまり翻訳という近代のイデオロギーを崩すものとして、ブラジルのモダニズム文学、芸術運動以後について考えたい。

< 3つのTranscreateの情景 >

その場合、3つの情景が思い浮かぶ。それは、Joyce(1882-1941)をtranscreateするHaroldo de Campos(1929-2003)、芭蕉(1644-94)をtranscreateするPaulo Leminski(1944-89)、Carlos Drummond de Andrade(1902-94)をtranscreateするElizabeth Bishop(1911-79)という3つの情景である。私の関心は、亡命者文学やマイノリティ文学、エクソフォニー文学よりも、ある人間が多くの偶然の中で(育つ中で)、日常的な生を送りながら、ふとテキストに出会い、transcreateする出会いの強度やつながりに関心がある。それと関わるような情景を提示したい。

第一の情景：昨年夏になくなった詩人、カンポスはモダニズム以後の文学の理論家として最も重要な詩人・批評家・翻訳者である。この20世紀のアヴァンギャルドの文学実践者は多少とも批評や詩やエッセイというジャンルを超えた創作者となっている。一体化した実践としての翻訳は批評としての翻訳行為だった。彼のいうトランスレーション(転移・創造)は、伝統的な翻訳概念を崩壊させる。私は、ボーダーライティングを見ていく中で、亡命者文学やマイノリティ文学、エクソフォニー文学よりも、むしろある人間が多くの偶然の中で日常生活の中で、あるテキストと出会い、のみ込んでいくプロセスとパトスに関心がある。4年前のサンパウロで、6月16日に「フィネガンズ」というパブ・バーで集まる「ブルームズ・デイ」(1904年6月16日に主人公がダブリンの街を徘徊する作品『ユリシーズ』という小説の主人公の名前を取った、アカデミックなジョイスの愛好者の集まり)において、ユリシーズのある断片(ナウシカの章)を十数カ国語(英語、ポルトガル語、ギリシャ語、フランス語、イタリア語、ロシア語、ドイツ語など)で翻訳し朗読する催しがあった。こうしたサンパウロの移民言語で翻訳され朗読されるというのは、移民国家の歴史と多言語性を蘇らせるものであった。主催者のカンポスから刺激を受けて、去年那覇で同じような催しブルームズ・デイを行った。那覇は、複雑な琉球諸語からなる複合的なトポスであり、共通語としてのメディア的なウチナヤマト語という状況が似合っているように思ったのである。そこでは沖縄に住むさまざまな人々によって、12の言語(英語、日本語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、日系ブラジル語、ロシア語、・・・朝鮮語、関西弁、沖縄語)によってユリシーズのセイレーンなどが朗読された。沖縄の詩人によるウチナ語での朗読パフォーマンスのときに、ジャズのサクソフォニストが乱入して予期せぬセッションが行われた。言葉が音と

して楽器の音と戦うという刺激的な催しとなった。

カンポスは1962年に世界で最初にジョイスを翻訳しようとした。また、パウンドやマヤコフスキー、マンデルシュタム、フレーブニコフといった作家詩人たちを翻訳し、日本の能楽をも翻訳、つまりトランスクリエイトしてきた。彼がジョイスの『フェネガンズ・ウェイク』の最初の翻訳者であることは注目したい。ジョイス的な造語 *verbivocovisual* は、詩的言語の機能を一語で示している。カンポス兄弟が50年代より進めたコンクリートポエトリー運動（1956年にサンパウロの近代美術館で行われた展示会で出発した）は、詩の言葉を意味の世界ではなく、具体物として、文字と視覚、音として捉える運動であり、声としての詩を前景化し、空間的な具体性（文字と配置）を志向する。たとえば俳句も本来具体詩であり、俳画のようなものと結合して特定の空間（日本の家屋における掛け軸など）を提示するものといえる。そして、こうした具体詩運動は、先駆者パウンドやマラルメ、マヤコフスキーたちの欧米の前衛的な言語的实践とつながるものである。このジョイス的な造語はこうした状況を実にうまく捉えたものである。

第二の情景：さて、ブラジルで俳句を詩の前衛運動へと架橋したのがレミンスキーである。彼はハイカイの実践をハイトロピカイと呼び、時空を超えて熱帯アメリカの移住地に花咲く移住ポエジーを創造した。たとえば「*entrepedra e pedra nao vai ficar pedra sobre pedra*」（石と石との間に石はない。石の上にも石がない。）という詩は、ペドラ（石）という具体的なものが、相互の関係性を終末的な状況として捉えかえず詩となっている。もう一人の詩人、Decio Pignatariは『境域の文学』の中で取り上げた詩人であるが、彼の詩に *hambre hombre hembra* という3つの言葉だけからなるスペイン語の詩がある。詩の意味は「飢え」「男性」「女性」を示すが、これは視覚的に配置された詩である。音声的には重なっているが意味としては異なっている。ジョイスの言う詩的な実践に近いものであり、そのマニフェスト「時空間における言葉とものとの緊張」に照らしてみただけの場合、非常に示唆的である。翻訳できるかどうか考えると、それが不可能であることがわかる。このスペイン語の詩を近似的な言語であるポルトガル語に翻訳した場合、インターアクションが起こりえない。詩の具体性が翻訳不可能であるような事態を示している。背後にあるのはポルトガル語の *fome* という言葉であり、キーワードとなっている。つまり、Glauber Rocha という監督によって作られた60年代のブラジル映画の重要な概念である「飢えの美学」という言葉を想起させる。そこには、西洋によって植民地化され、周辺化された「飢えの現実」からは始めなくてはならないという文明批判的なメッセージが込められている。それは文化運動のキーワードであり、また創造的翻訳でもあった。

第三の情景：1956年の具体詩運動の前史でありその源泉にある文化運動が、1922年サンパウロで

行われた「現代芸術週間」であったが、それはシュルレアリスム、キュービズム、表現主義とつながるブラジルのモダニズム運動である。それは、一種の「食人宣言」とも呼ぶべきものであり、最も革新的な思想である。アンドラージュの言葉にTubi or not Tubi, that is the question.というのがある。これは、トピイ族が1554年にポルトガル人宣教師を食べたという言い伝えを、植民地ブラジルの始まりとする宣言である。ブラジルは、西洋的な崇拜とナショナリズムとに引き裂かれる葛藤の中で、拒否や受け入れではなく、西洋を消化してしまうという行為に向かった。文化的自立を考える場合に、西洋を転用した文化的モデルを作り、戦略的な方法論で栄養分を摂取していたのである。そうした行為とは、複合体を作り出す力であり、食人のメタファーは大きな影響力を持った。つまり、カニバリズムとしての翻訳(カンポス)は、原点にあるものを取り出し取り込むという(翻訳の不可能性から始める行為)でもある。カンポスは、ダンテからの翻訳をtransparadisationと名づけ、楽園を転移させていく言語的实践と考え、ゲーテのファウストの翻訳をlucification(悪魔学の置換行為)と名づけ、ホメロスの翻訳をhelenization(ヘレニズムの置換行為)と呼んでいる。一言語を他の一言語に翻訳するという行為が否定される。モノロジックな言語を乗り越える必要がある。つまり転移され創造されるものとして捉える。波乱万丈の移動に生きたアメリカ・ブラジル女性詩人ビショップは、アンドラージュとも交友があったが、彼の詩を翻訳している。彼女の詩「Insomnia」(不眠症)は、昼と夜、太陽と月という裏の平行世界を、夜起きていることによって可能な幻視によって表現したものであり、影の世界における視力がよく描出された詩である。これをブラジルのミュージシャンがCDにしている。時間がないので省略するが、以上3つの情景に翻訳不可能性を秘めた転移と創造の行為を見ることができる。

当日は交通事情のため、今福氏の到着が遅れ講演の開始時刻も遅れた。さらに天候が悪く寒風のためか、参加者は少なかったが、講演は2時間以上にわたる熱弁で非常に興味深い内容であった。討論時間がなくなってしまったが、その後の懇親会では、そのおおらかな人柄のゆえに活発な意見交換ができたと同時に、その該博かつ鋭敏な問題意識と視野の広さに接して、大いに知的刺激を受けることができた。50年代ブラジルの前衛運動は、ちょうどウィーングループが活動した50年代のウィーン前衛文学運動と時代的にもコンセプト上も一致している。視覚と聴覚を融合させたコンクレートポエジー運動の発展が世界的に共通する現象であったことは興味深い。

本共同研究は、文学を超える文化現象にまで踏み込んで継続的に研究を深めていきたい。そしてさらに個々の研究に反映させ、成果を出していきたいと思う。

(文責：土屋勝彦)